

日本英文学会北海道支部 第62回大会プログラム

日時：2017年10月28日(土)

会場：北海学園大学豊平キャンパス 6号館

(札幌市豊平区旭町4丁目1-40)

日本英文学会北海道支部

後援：北海学園大学

〈会場アクセス・地図〉

- ・地下鉄：東豊線「学園前」駅にて下車。3番出口直結（「大通」駅より5分、「さっぽろ」駅より6分程度）
- ・タクシー：大通付近から1,000円程度。



〈懇親会のご案内〉

日時：10月28日(土) 18:30～20:30

場所：グラス・シーズンズ(京王プラザホテル札幌1階、札幌市中央区北5条西7丁目2-1)

会費：一般5,000円、学生2,500円

* 懇親会参加ご希望の方は、10月14日(土)までに支部ホームページ (<http://www.elsj.org/hokkaido/>)よりお申し込みください。ご不明な点がございましたら、事務局 (Eメール：hokkaido@elsj.org) までお問い合わせください。

* 昼食につきましては、大学構内に生協を含めて食堂が2軒あります。また大学そばにもコンビニエンス・ストア、ラーメン店、レストラン等がございます。

* 書籍展示：6号館3階ホール

* 発表者・参加者控室：6号館3階C302演習室(茶菓の用意があります)

日本英文学会北海道支部第62回大会プログラム

日時：2017年10月28日(土)

会場：北海学園大学豊平キャンパス 6号館

(札幌市豊平区旭町4丁目1-40)

受付開始 (9:30～) (6号館 3階ホール)

開会式 (9:50～) (C30番教室)

開会の辞

日本英文学会北海道支部支部長

瀬名波 栄 潤

理事会 (12:00～13:00) (C303演習室)

〈文学部門〉 (C30番教室)

研究発表 (10:00～11:45)

1. (10:00～)

司会 元北海道教育大学岩見沢校

皆 川 治 恵

Memories, Imagination and Dreams

on Sherman Alexie's Concept of Time in *The Lone Ranger and Tonto Fistfight in Heaven*

北海道大学大学院

呉

憂

2. (10:35～)

司会 北海道薬科大学

板 倉 宏 予

“Shape all light”に見られるシェリーのnegative idealism

“The Triumph of Life”における理想的女性像の否定的表現

酪農学園大学

白 石 治 恵

3. (11:10～)

司会 北海道医療大学

鎌 田 禎 子

漏洩の恐怖

Herman Melvilleの“The Town-Ho's Story”

北海道大学大学院

鈴 木 一 生

特別講演 (13:00～14:10)

司会 北星学園大学

伊 藤 章

ドライサー文学とランチ

東京都立大学名誉教授

村 山 淳 彦

シンポジウム (14:30～17:00)

—日本アメリカ文学会北海道支部共催—

21世紀におけるジャック・ロンドンの新たな魅力とは

司会・講師 札幌学院大学

岡 崎 清

講師 名寄市立大学

小古間 甚 一

講師 明治大学

大 矢 健

〈語学部門〉 (C31 番教室)

研究発表 (10:00～10:35)

Inverse Scope and Unaccusativity Alternation

司会 旭川医科大学 三好暢博

北海道大学 奥聡

特別講演 (10:50～12:00)

5文型は学習上役立つ

司会 北海道大学 高橋英光

東北大学名誉教授 中村捷

セミナー (13:15～14:35)

認知言語学から見た文法化

司会 藤女子大学 對馬康博

九州大学 大橋浩

シンポジウム (14:45～17:10)

所有表現に関する諸問題

各理論的枠組みを用いて

司会・講師

札幌大学

濱田英人

講師 北海道教育大学函館校

上山恭男

講師 北見工業大学

戸澤隆広

総会・閉会式 (17:15～) (C30 番教室)

閉会の辞

日本英文学会北海道支部副支部長

上野誠治

懇親会 (18:30～20:30)

場所：グラス・シーズズ(京王プラザホテル札幌1階、札幌市中央区北5条西7丁目2-1)

〈発表要旨〉

〈文学部門：研究発表〉

Memories, Imagination and Dreams

on Sherman Alexie's Concept of Time in *The Lone Ranger and Tonto Fistfight in Heaven*

呉 憂 (北海道大学大学院)

Sherman Alexie's concept of time in *The Lone Ranger and Tonto Fistfight in Heaven* (1993) is not linear, but a spiral Möbius band combining the past, the present and the future. As Alexie mentions in "A Drug Called Tradition", the past and the future are "skeletons" made of "memories" and "dreams", always telling the time and reminding people of "the now". While in "Imagining the Reservation", he refers to "imagination" as a survival strategy. By frequently using flashbacks, story within a story, he mixes different elements together to demonstrate the past is not only represented by personal "memories", but also wrapped in imagined stories as well as dreams or nightmares, and the future has been forecasted by stories or dreams. The combination of the past, the present and the future repeats, resembling a Möbius band. Previous studies, such as by Janine Richardson and Jerome Denuccio, have paid attention on a temporal dimension in Alexie's works, but mainly focus on his novels and only explain his reconstruction of the past against the occidental history and the dominant culture. This analysis, however, explores Alexie's concept of time that makes his short stories unique beyond the socio-historical perspective.

“Shape all light”に見られるシェリーの negative idealism
 “The Triumph of Life”における理想的女性像の否定的表現

白石 治恵 (酪農学園大学)

本発表では、Percy Bysshe Shelley (1792-1822) の“The Triumph of Life” (1822) 後半の“Shape all light”が登場する場面において、シェリーの negative idealism (筆者の考えるシェリーの創作動因および表現方法) がこの詩の中でも特に顕著に表されており、これまでシェリーが追求してきた理想的女性像の到達点が negative な手法で表現されていることを、過去の作品 *Alastor; or the Spirit of Solitude* (1815), “Prince Athanase” (1817), *Julian and Maddalo* (1818) 等と比較しつつ論証する。“Shape”については、Intellectual Beauty との類似、詩人の象徴、あるいは詩人の抑圧者、破壊者など、多く論じられてきたが、名前に対する否定性が特定のイメージの固定を避けて読者の想像を広げることや、人と自然の破壊 = 否定的行為が死からの再生と理想探求を暗示する等、本発表ではこの詩においてシェリーが到達した究極の理想的女性像が、negative な表現方法でより効果的に浮き彫りにされているという新たな視点を検証してゆく。

漏洩の恐怖

Herman Melville の “The Town-Ho's Story”

鈴木 一生 (北海道大学大学院)

Herman Melville の代表作、*Moby-Dick; or, The Whale* (1851) における数ある章のなかでも、

Chapter 54の“The Town-Ho’s Story”は、とりわけ批評家たちの関心を集めてきた章の一つである。というのも、本章に当たる部分は、*Moby-Dick*出版に先駆け、独立した短篇として雑誌掲載されており、“The Town-Ho’s Story”とは、*Moby-Dick*全体の、いわば縮図であると考えられてきたからだ。

そんな本章において繰り返し登場するのが、漏洩という現象である。物語の要は、捕鯨船 Town-Ho号で起こった船内反乱と、その発端となった人物への、神の裁きとも見まがう巨鯨の行動であるが、すべてのきっかけとなるのは船内への浸水であり、プロットが進行する背景では、水の漏洩が常に問題となる。

*Moby-Dick*を通読すると、漏洩するのは海水や鯨油だけではないことがわかる。作者Melvilleは、自らの魂でさえ、身体から漏れ出すものとして描くのだ。本発表では、“The Town-Ho’s Story”における漏洩を手掛かりに、形なく、捉えることが困難な魂の姿を追い求めたMelvilleの軌跡を、少しばかり辿ってみたい。

〈文学部門：特別講演〉

ドライサー文学とリンチ

村山 淳彦（東京都立大学名誉教授）

セオドア・ドライサーの初期の短篇小説に「ニガー・ジェフ」という作品がある。アメリカ文学には独立革命時代から現代にいたるまでのリンチを描いた文学作品は少なからずあるが、「ニガー・ジェフ」はあまり知られていない小品とはいえ、南北戦争後のいわゆる再建時代に猖獗をきわめた黒人に対するリンチ事件を白人作家が真正面から取りあげた数少ない例である。この機会が与えられたのを幸い、「ニガー・ジェフ」を読み直し、その文学史的意義についてのみならず、近年米国でリンチについての歴史的、文化的、文学的研究が活況を呈している事情に触れながら、リンチがドライサー文学の展開にとって有する意義についても考察してみたい。

〈文学部門：シンポジウム〉

21世紀におけるジャック・ロンドンの新たな魅力とは

司会・講師 岡崎 清（札幌学院大学）
 講師 小古間甚一（名寄市立大学）
 講師 大矢 健（明治大学）

21世紀になってジャック・ロンドン(1876-1916)への関心がますます高まっているように感じる。アメリカにおいては、ロンドン研究のパイオニア的存在であるEarl Laborが2013年に伝記を発表し、2014年にはJay Williamsが、そして2015年にはCecelia Tichiが、新たな視点からロンドンの人生を読み直す伝記を発表している。研究においても、*Studies in American Naturalism*の2015年冬号で“Jack London and Ernest Hemingway”と題した特集が組まれたり、2017年には、執筆者36人が論文を寄稿した*The Oxford Handbook of Jack London*が出版されたりするなど、新しい視点

からロンドンを読み直す作業が進んでいる。日本においても、文芸誌『MONKEY』が「ジャック・ロンドン 新たに」をテーマにロンドンの魅力を紹介している。昨年12月には、クラリス・スタッツによる伝記『アメリカン・ドリーマーズ：チャーミアン・ロンドンとジャック・ロンドン』が翻訳出版された。こうした流れを踏まえて、これまでロンドン研究に携わってきた3人がロンドンを読み直し、それぞれの視点から、21世紀におけるロンドンの新たな魅力を語る。

伝記にみられるジャック・ロンドン

TichiとReesmanを中心に

岡崎 清

かつてAlfred Kazinが、*On Native Grounds* (1942)のなかで“The greatest story he ever wrote was the story he lived[.]”と書き、それに呼応するかのよう、ロンドンの伝記が伝記作家やアメリカ文学・文化研究者の手でこんにちまで書き続けられてきた。今世紀に入ってからもロンドンの新たな評価が提出され、写真家としての側面が浮き彫りにされている。

没後百年を経過したが、近年のロンドン伝記が何を強調し、何を付け加え、何が修正されているのか検討してみたい。さしあたってはロンドン研究プロパーのJeanne Campbell Reesman著*Jack London's Racial Lives: A Critical Biography* (2009)と、札幌クールセミナーにも講師として招かれたアメリカ文学・文化研究のCecelia Tichi著*Jack London: A Writer's Fight For A Better America* (2015)を取り上げる。

ジャック・ロンドン小説の犬たち

小古間 甚一

近年、動物に関する哲学的な議論が盛んになるとともに、ジャック・ロンドン研究においても犬を主人公とする物語に注目が集まっている。ロンドンの代表作である『野性の呼び声』(1903)をアレゴリーとして読むのではなく、犬という動物を描いた小説として再評価する動きがある。そのような流れの中で、私自身『野性の呼び声』を動物の物語として読み直し、昨年度、ある学会で発表した。しかしながら、彼の作家活動全般を見渡してみると、『野性の呼び声』や、犬を主人公としたもう一つの代表作でもある『ホワイト・ファング』(1906)以外にも、犬を主要な登場人物に据えた物語を彼はいくつか書いている。その意味では、ロンドンには犬にこだわった作家だった。今回の発表では、『野性の呼び声』だけでなく、ロンドンの批評史においてほとんど光が当てられることのなかった晩年の犬の物語も視野に入れながら、ロンドンが作品の中で犬をどう扱っているか、それが彼のにとってどのような意味があったのか、について考えてみたい。

ホワイト・アンド・レッド

The Call of the Wild and the Klondike

大矢 健

ロンドンのクロンダイク作品における人種意識 (racialism) について考えてみたい。

『野性の呼び声』(1903)は、作家の代表作であるとともに、ネイティブ・アメリカン (インディ

アンやエスキモー)と白人帝国主義の関係やホワイトネスの構築のためにしたロンドンの思考が一つの頂点に達した作品だと思う。クロンダイクというトポスも狼犬というモチーフも作家は生涯手放すことはなかったが、それでも『呼び声』以降に書かれた *White Fang* (1906)、短編の代表作 “Love of Life” (1903 執筆) や “To Build a Fire” (1907 執筆) には、初期クロンダイク短編集の3作 — *The Son of the Wolf* (1900)、*The God of His Fathers* (1901)、*Children of the Frost* (1902) — に含まれ『野性の呼び声』へとつながってゆく、種とは? (wolf-dog) 人種とは? (half-breed) という問いはないようだ。

『呼び声』で考えてみたいのは、白鯨を想起させる白いスピッツ、突然にソーントンが作品に登場する場所(ホワイト・リバー)、もちろんイーハット族(インディアン)などである。第一短編集『狼の息子』の最後を飾る「極北のオデッセイ」の反本質主義(anti-essentialism)的思索の延長線上に『呼び声』を位置づけることになるだろうと思う。

〈語学部門：研究発表〉

Inverse Scope and Unaccusativity Alternation

奥 聡 (北海道大学)

Japanese has been claimed to be scope-rigid as in (1), but there are some instances which easily allow inverse scope interpretation as in (2). In this presentation, I will argue that sentences such as (2) can be analyzed as unaccusative sentences in which the surface subject is the underlying complement of the verb as in (3), where \forall c-commands \exists , leading to the inverse scope reading in (2). A support for the proposed analysis is the floating quantifier phenomenon as in (4). I will further explore the interesting possibility that *-teiru* can alter unergatives to unaccusatives and thus the inverse scope and the floating quantifier are both possible as predicted ((5)-(6)).

- (1) TA-ga hitori dono hon-mo yonda ($\exists > \forall$; * $\forall > \exists$)
TA-NOM one very book-MO read 'A TA read every book'
- (2) TA-ga hitori dono kyositu-ni-mo taikisita (ok: $\forall > \exists$)
TA-NOM one very room-in-MO waited and watched
'A TA waited and watched in every classroom'
- (3) dono kyositu-ni-mo [_{VP} TA-ga hitori taikisita]
- (4) TA-ga dono kyositu-ni-mo [_{VP} _____ hitori taikisita]
- (5) TA-ga sanin dono gurando-de-mo [_{VP} _____ hasit-teiru] (ok: $\forall > \exists$)
- (6) TA-ga dono gurando-de-mo [_{VP} _____ san-nin hasit-teiru]

〈語学部門：特別講演〉

5文型は学習上役に立たない

中村 捷 (東北大学名誉教授)

よりよい英文法教育のために、5文型の問題点を検討し、範疇に基づく文型を提示する。

1. 5文型の概念誕生についての歴史的記述：一般にはOnionsが提示して細江逸記の文法書によって広まったと言われているが、Onionsよりも5年前に齋藤秀三郎が*Practical English Grammar*において指摘していること、さらに5文型の始祖はSonnenscheinであることが判明している。
2. 5文型の内包する問題点：(1) 範疇に基づく5文型の規定は解釈的であって発話型(生成的)ではないこと、したがって、発話型のコミュニケーションを目指す指導には不適切であること、(2) 5文型はそもそも記述的に不十分であってすべての文型を網羅することができないこと、(3) 5文型は機能範疇を用いて統語範疇の語順を記述していることから、機能と範疇の複雑な関係の理解を前提とするので、不必要な学習負担を強いていること。
3. 5文型は文科省の指導要領における説明とか文法の執筆者が文型をまとめるに当たっては役に立つ、つまり、英語をよく知っている人が整理をするのには役に立つが、英語を知らない学習者の視点から見ると不適切な概念であること。

〈語学部門：セミナー〉

認知言語学から見た文法化

大橋 浩 (九州大学)

名詞や動詞などの語彙的な意味を表す語や構文が、前置詞、接続詞や助動詞のような文法的機能を持つように変化することを文法化とよぶ。文法化研究は1990年代以降急速な進展をとげたが、言語への認知的アプローチによる研究も非常に多く見られる。認知言語学は文法化の分析に適用されることでその理論的有効性を実証してきたと見ることができる。このセミナーでは、認知言語学による分析が文法化のプロセスや動機づけ、また、文法化にともなう現象を自然に捉えることができることを示したい。具体的には、言語は繰り返し使用されることでユニット—構文—として定着し、個々の構文がネットワーク状に結びつくことによって言語知識を構成するという使用依拠的な構文観に基づく分析が文法化に有効であること、文法化には推論、類推、メタファー、メトニミーなどの一般的認知能力が関わっていることなどを事例に則して論じたい。

〈語学部門：シンポジウム〉

所有表現に関する諸問題
各理論的枠組みを用いて

司会・講師 濱田 英人（札幌大学）
講師 上山 恭男（北海道教育大学函館校）
講師 戸澤 隆広（北見工業大学）

我々は外界世界の事態を知覚するとそれを認識世界で一定の仕方で切り分け、カテゴリー化して言語化する。このとき、そのカテゴリー化の基本となるのが物体と動きであり、それに対応する言語カテゴリーは名詞と動詞である。一般的には名詞は概念的に自律的であり、動詞は概念的に依存的である。しかし、名詞が概念的に自律的であるということは、それが独立的に存在するというわけではない。というのは、我々がモノを概念化する場合であっても、それが知覚体験される状況と切り離されてはいないからである (Barsalou (2016))。この意味でほとんどの実体は relational であるとも言えるわけである。そしてこのことからすると、NP's N という所有表現は属格名詞と主要部の名詞との間に存在する一定の関係を言語化したものであり、また、言語が生物進化と同様に、必要なものは発達し、そうでないものは発達しないとすると、's 属格、of 構造、名詞複合語という表現形式は2つの実体の関係の在り様の違いとみることができる。このシンポジウムでは、生成理論、機能主義言語学、認知言語学の視点から、それぞれの表現のメカニズムについて議論する。

(文責：濱田 英人)

s 属格、of 属格、名詞複合語相互の関連性について 機能的観点からの考察

上山 恭男

Rosenbach (2014: 232) では、A's B、あるいは B of A の両属格（前者を s 属格、後者を of 属格と呼ぶ）において、①A が軽ければ軽いほど、②A が有生であれば、③A の既定性が高ければ、④A の主題性が高ければ、⑤A の所有性が高ければ等、①～⑤のいずれの場合においても s 属格が使用される傾向があり、さらに文脈上、⑥直前で s 属格が使われていればそれを維持しようとする傾向が働き、s 属格が使われる傾向にある、と指摘している。

そこで、本発表では、①～⑥の生起分布を、機能的観点から統一的に説明する。また、名詞複合語 (N+N) の s 属格との関連性やその位置づけを考察する。文から名詞句、さらには名詞への連続性の中に、s 属格と of 属格と名詞複合語を位置づけて、3者間の関係を明確にする。英語母語話者が、無意識に s 属格や of 属格や名詞複合語といった所有表現が使い分けられるのは、このような連続性の中に、それぞれの所有表現が直感的に位置付けられるからであろう。英語学習者にとっては、文から名詞までの連続性の中に、s 属格 (A's B)、of 属格 (B of A)、そして名詞複合語 (A B) のそれぞれを、意識的に位置付けられることが肝要である。

NP's N と the N of NP について

濱田 英人

英語の所有表現である NP's N と the N of NP については Hawkins (1981) や Deane (1987)、また、Taylor (1989) をはじめ多くの研究がなされている。本発表では認知文法の視点からこうした先行研究を踏まえてこの2つの表現について考察し、それぞれの表現形式がどのような認知能力を反映しているのかを明らかにする。具体的には、NP's N は、Langacker (1993) が主張しているように、それぞれの名詞は参照点/ターゲットとして認識されており、参照点からターゲットへの目立ち度の移行があることから、両者は共に概念的に自律的であることを主張する。また、NP's N の構造では NP's が N を同定するためには前者が後者の直接スコープとなっている場合に容認可能となることを具体的な事例を挙げて論じる。それに対して、the N of NP では of は2つの実体が *intrinsic* な関係にあることを表し、主要部の N は *relational noun* であることから、それだけ概念的に依存的であると言える。the N of NP では、NP が N を特徴付ける機能を果たしていることから、N と NP のそれぞれの目立ち度が保持されており、このことが the N of NP の容認可能性の根底にあることを述べる。

Whose NP は関係節の先行詞になれるか？

関係節の内部構造の解明

戸澤 隆広

生成文法理論において、疑問所有代名詞 *whose* は *who* が DP の指定部を占め、's が D head であると仮定されている。本発表では、*whose* のこの構造的特性に着目し、ある統語テストを提唱する。この統語テストにより、関係節の派生方法に関わる問題を解決しようとする。関係節には主に二つの分析がある。一つは *Matching* 分析である (Chomsky (1977))。この分析では、演算子移動を含む CP が関係節の先行詞の名詞句に付加する。もう一つは主要部繰り上げ分析である (Schachter (1973))。この分析では、関係節の先行詞が関係節内から先行詞の位置へ移動する。これらの分析のいずれが妥当なのか結論に至っていない。この問題を解決するための理論的仮定として、Chomsky (2008, 2013, 2015) のラベル付けアルゴリズムを採用し、句範疇は移動先でラベルになれないとする。そうすると、*whose NP* は句範疇であることから、移動先でラベルになれないことになる。*whose NP* が持つこの統語特性に基づき、*whose NP* が関係節の先行詞になれるかどうかの統語テストを設ける。この統語テストにより、関係節には *Matching* 分析と主要部繰り上げ分析の両方が可能であることを示す。